

Manhattan Reverie

マンハッタンの幻想

Richie Beirach Trio

リッチー・バイラーク・トリオ

- あなたは恋を知らない****You Don't Know What Love Is** 〈D. Raye, G. DePaul〉(5 : 14)
- オン・グリーン・ドルフィン・ストリート****On Green Dolphin Street** 〈B. Kaper〉(6 : 04)
- イフ・アイ・ワー・ア・ベル****If I Were A Bell** 〈F. Loesser〉(6 : 35)
- マンハッタンの幻想****Manhattan Reverie** 〈R. Beirach〉(5 : 07)
- ショパン・エチュード****Etude (No.6 in Eb minor , Op.10)** 〈 Chopin 〉 (8 : 49)
- トランジション****Transition** 〈J. Coltrane〉(9 : 02)
- 星影のステラ****Stella By Starlight** 〈 V. Young 〉 (8 : 34)
- ヴェイルス****Veils** 〈 R. Beirach 〉 (5 : 37)
- ブラッド・カウント****Blood Count** 〈 B. Strayhorn 〉 (6 : 30)
- フットプリント****Footprints** 〈 W. Shorter 〉 (7 : 52)

リッチー・バイラーク
Richie Beirach (piano)
ジョージ・ムラツ
George Mraz (bass)
ビリー・ハート
Billy Hart (drums)

録音 : 2006年3月25、26日　**ザ・スタジオ**、**ニューヨーク**

© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Assistant Producer : Lee Ann Ledgerwood
Recorded at The Studio in New York on March 25 & 26 , 2006
Engineered by Katherine Miller Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front & Art : Momar Ndiaye
Designed by Taz

サンプルを指導している。1つは5人編成のクインテットで60年代の即興演奏手法などを教えている。私のオリジナル曲や生徒が作曲した作品を演奏している。もう1つはピアノ・トリオで、オスカー・ピーターソン、ビル・エバンス、アーマッド・ジャマール、チック・コリアなどのピアノ手法を分析しながらジャズ・ピアノをマスターしていくというコース。毎週、生徒は曲を作ったり、演奏して、それに対して、私が指導を施すという仕事だ。

今回のアルバムのコンセプト、録音にまつわるエピソードをきかせて欲しい このアルバムでは、自分のやってきたことを、このあたりで、総括してみたいというような気持ちになっていたことはたしかだ。これまで自分の人生を賭けてジャズと取り組んできたが、自分が目指してきたことはストレートアヘッドなジャズとクラシック音楽を同列にみながて、それを即興演奏という手法で融合させるとというのが、私のテーマになってきた。2006年はたまたまマイルス・デイビスとジョン・コルトレーンの生誕80年という記念すべき年に当たっているし、曲目を見渡すと、マイルスとゆかりの深い曲、ウエイン・ショーターの<フットプリント>やコルトレーンの<トランジション>というような60年代の曲に比重がかかっているけど、演奏内容としてはあくまでも2006年というたった今の時点でアプローチしたつもりだ。 このトリオはありきたりのトリオとは違う。ムラーツともハートとも30年も一緒にやってきた間柄なんだ。いまでは兄弟みたいな存在だ。ムラーツは現代屈指の名ベークシストだし、ビリー・ハートは65歳になって、いまや真にマスターと呼びにふさわしいドラマーになった。このトリオではリハーサルなど必要がないほどに互いのことがよく分かり合っている。私にとって今回のアルバムはマイルス・デイビスの「カインド・オブ・ブルー」と同じような作品になったと思っている。このトリオでスタジオに入るまで、リハーサルはしなかったし、曲のアレンジもごくごく簡単なものだった。私はドイツだし、互いに遠く離れているので、リハーサルは電話を通じて曲の構想を伝えたりのものだった。スタジオに集まってからの本番では最初からテープを回して、リハーサル・テイクが本番テイクになった曲がなんと10曲中の7曲にも達したんだ！つまりほとんどの演奏は、一発勝負のファースト・テイクで完了したんだよ。演奏から感じ取れるフレッシュネスとかエネルギーの爆発はそこからきていると思う。 本来はバラード・テンポで演奏されるような曲が、速いテンポで演奏されたり、アルバム

全体に溜め込まれたエネルギーの爆発のようなものが感じられるのはそのためだったんだ、それを感じ取ってくれたのは凄く嬉しいね！じつは、60歳近くになると、本当は人間的にも角が取れたり、メロウになり、優しくなる、というのが普通だけど、今回の演奏ではみんなが激しく燃えたんだ。演奏がどれもインテンスなんだ。ライブタッチに住んでいる間になんというか「ニューヨーク・エネルギー」がたまりたまたって、一気に吹き出し、爆発したみたいなんだ。これもライブタッチ効果といえるかもしれない(笑い)
2007年で60歳を迎えるリッチー・バイラークにとって、ライブタッチでの“教授生活”はずべての面で“秀”と出たようだ。いまでもニューヨークには年に3回とか4回は帰るというリッチーはこの8月末にもニューヨークに戻って、このアルバムの仲間たち、ジョージ・ムラーツとビリー・ハートとの3人で「パードランド」に出演、久々にマンハッタンへの想いを満たすことになっている。
1) You Don't Know What Love Is　この曲の解釈としては完全に意表をつく速いテンポで演奏される。ジョージ・ムラーツのベースがテーマの展開部でくり広げる同じパターンを反復するオープニングのアレンジはこの曲の数多いレコーディングのなかでひときわ際だつ編曲となっている。ソロに転じてからのバイラークは活力あるアドリブを聴かせ、後半でドラム・ソロが登場する。
2) On Green Dolphin Streetよく知られた旋律をトリオはアブストラクトにインタープレイして新鮮なイメージを生み出すことに成功している。ソロを先導するのはバイラークで、続いてベースのムラーツがソウルフルなソロを聴かせる。ビリー・ハートのサウンド・バランスを見事にコントロールしたサポートも光っている。
3) If I Were A Bell　テーマ部はこれもまた急速調のテンポで展開される。ソロ・コーラスではテンボを変えろなど、タイム・チェンジをとまなせて活力と気魄に満ちた演奏がくり広げられる。バイラークがムラーツとハートが送り出すリズムに立ち向かうようなエネルギーを感じさせながらぐいぐいと演奏を前進させている。ムラーツのベース・ソロも聴きものだ。
4) Manhattan Reverie　アルバムの標題にもなったこの曲の“ Reverie ”は“空想”とか“夢想”のこと。この新曲はバイラークがライブタッチから様々な思い出がいっぱい詰まった故郷のマンハッタンとそこに住む友人や、ジャズへの想いをのらせて作曲したバラード。ほのぼのとした情感をたたえて演奏される。
5) Etude (No.6 in Eb minor , Op.10)　リッチー・バイラークは1991年のアルバムでもショパンの練習曲からよく知られる<別れの曲>を演奏している。バイラークにとってショパンの練習曲はピアノを志し始めた頃から弾きなじんできた愛奏曲であり、この曲（練習曲 作品10の 第6番 変ホ短調）もジャズのスタンダードと同じように演奏してきた曲だ。「この驚くべきメロディをジャズ界でまだ誰も演奏していないのは不思議」と感じて採り上げたが、クラシックのようには響かないような演奏にすることが課題だったという。ムラーツはここでは弓弾きに転じている。
6) Transition　ジョン・コルトレーン・カルテットが1965年の「クルセ・ママ」セッションで演奏した曲だ。トリオはコルトレーン・カルテットの重厚で荘嚴なサウンドを見事に描き出している。ビリー・ハートがエレクトレイブ・ジョーンズのダイナミックなドラミングを連想させるワフルなプレイで演奏にダイナミズムをもちたらずあたりも聴きもの。ベース、ピアノ、ドラムスの順に奔放なソロがくり広げられる。
7) Stella By Starlight　リッチー・バイラークはメロディを大胆にデフォルメしてテーマを展開する。主題部ではリズムがテンションをはらんでいるが、即興パートではリラックスしたスイングとテンションを伴うリズムとが交錯する。バイラークはここではシングル・ノートとブロック・コード奏法を対比させながら多彩なソロを展開する。ピアノに続いてムラーツのイマジネイティブなベース・ソロが登場する。終曲部に付けられるエンディングも印象的だ。
8) Veils　1980年にジョン・アバークロンビーの「R-M-」と名付けられたアルバムで共演した際にバイラークが提供したオリジナル。バイラーク自身の演奏としてはこれが初録音になる。
9) Blood Count　ビリー・ストレイホーンの名曲の1つ。エリントン・オーケストラによって60年代に初演されたが、バイラークは80年代にスタン・ゲッツのもとでしばしばこの曲を演奏しており、今回のアルバムでは、自身のお気に入りの演奏に上げている。スロウなテンポで濃密な瞬間が生み出される。バイラークは音を慎重に選んで間を充分にとりながら演奏し、ムラーツのベースが入り込めるようになっている（ピアノとベースによる対話になっている）。ビリー・ハートはブラシによる控えめなサポートに徹している。
10) Footprints　いきなりウエイン・ショーターがつくった曲の聴きなれたテーマがめまぐるしいまでに急速調のテンポで展開される。ピアノとベースのソロ・パートではテンポがゆるめられて、テンポ・チェンジによる効果もたらされる。このあとドラムスのソロを経て、テーマが再登場する。痛快きわまらないバイラーク・トリオのフレッシュな姿がここにあり。

児山紀芳（Kiyoshi “Boxman” Koyama）

リッチー・バイラークといえば、リリカルでクラシカルなタッチが持ち味の知的なピアニストというイメージがいつの間にか定着してしまっている。しかし、このスタンダードを中心に演奏した久々の新作を聴くと、これがあのバイラークなの？と疑いたくなるほどに、プレイが劇的に変貌しているのに驚かされる。ストレート・アヘッドにエネルギーを爆発させるかのように熱く燃えるプレイを聴かせているのだ。バイラークの周辺に何があったのか？それが知りたくて、彼の公式ホームページを開いてみると、やはり、気になる情報がもたらされた。2000年からバイラークはドイツのライブタッチに移住、そこの名門音楽院でジャズ・ピアノの教授になっていると出ているのだ。早速彼の電話番号をヴィーナス・レコードの原プロデューサーから教えてもらい、直接本人にきいてみた。

ライブタッチに移住したというそもその動機と近況が知りたい私は1970年代からジャズ界で活動してきた。ニューヨークに生まれ育ち、ジャズ界で30年近く過ごしてきて、50歳を過ぎた頃、2000年頃になって、やたらに外に出たいと感じるようになった。ジャズ界に大きな変化が起き始めたからだ。ウイントン・マルサリスとリンカーン・センターがジャズ界を牛耳るようになり、ジャズの方向性もネオ・パップというような保守的な傾向が強くなり始めた。ニューヨークは、もともと世界の最先端をいく文化や芸術の中心地だったんだ。実験とか、ムーブメントとか、革新とか、ニューヨークは情報の発信基地だった。ところが、私の仕事といえば、もっぱらヨーロッパや日本が中心で、それも私の仕事のかなりの部分がジャズを教えるというワークショップのような仕事が多くなり始めていたんだ。そしていつの間にか、この分野に生き甲斐を感じはじめていたんだ。私は1947年5月23日、ニューヨークの生まれだから2000年当時、もう50歳を超えていたからね。それで、私の、この辺で、進路を変えてみたいと考えるようになり、仲間内に、教育分野に進出したいという希望を伝えたんだ。早速バリとかベルリンなどから誘いがあったんだが、満足のいく条件ではなかった。そうこうするうちに、かつて私が教えたことのある教え子の一人から、ドイツのライブタッチで教えないかという連絡が入ったんだ。ラルフ・シュラーバーといって、90年代に私がニューヨークのニュー・スクールで教えていた頃の生徒の一人だったんだ。その彼が故郷に戻って2000年にはライブタッチの音楽学校でジャズ学部の部長に昇進していたんだ。母体のフェリックス・メンデルスゾーン音楽大学っていうのは1843年創設という世界で最も古い歴史と伝統を誇るクラシックの名門なんだ（(注：メンデルスゾーン一族が設立した旧ライブタッチ市音楽院が前身。同音楽院は日本最初の男子音楽留学生として1901年に滝廉太郎が派遣されたことでも有名)。ただ30年前にそこに創設されたジャズ学部はそれほどではなかった。そこで、私が教える仕事を探している という噂を耳にしたラルフが、声をかけてきたというわけなんだ。「学校の名声を高め、世界中から学生を集めたいので、教授としてフルタイムで働いてくれないか」というオファーだった。で、「いつから始める？」ってきくと、「その前にオーディションがある」っていうんだ。これには驚いたね。「お前はオレの教え子なんだろう、なのになぜ採用試験なんだ」っていい返したよ。あとでわかったことだが、この仕事は、国家公務員と同じで、国の承認が必要だったんだ。だから仮にマイルス・デイビスやビル・エバンスであっても、メンデルスゾーン音楽大学で教えるためには国のオーディションを受けなければならぬということだった。しかも一旦採用されると、この仕事は、自らの希望で引退しないかぎりは死ぬまで続けることができるという恵まれた仕事で、減多に空席ができないということも判った。ヨーロッパでは“教授”というのは特別な存在なんだということがこれからよくわかると思う。それで、私は自費でライブタッチにまで飛んて、「ピアノ教授採用試験」を受けたんだ。このとき、応募したピアニストは50人もいた。結果は私が第1位の成績を収めて、採用が本決まりとなったんだ。採用されたことで、私の人生は大きく変化した。半世紀を過ごしてきたニューヨークを離れて、ドイツのライブタッチに移住することになったんだ。ライブタッチでは立派な住宅を用意してくれたし、夏は3ヶ月、冬の2ヶ月は休暇が取れるんだ。一週間のうち、教えるのは3日間（火、水、木）だから、週末を利用して世界中のどこまでもいくんだ。できる人口は約5000人という小さな街だが音楽的には由緒ある街なんだ。すでに5年目になるが、凄く充実した日々を送っている。休みが多いから、ヨーロッパの各地で演奏している。たしかにホームシックになることはある。昔からの仲間のデイブ・リーブマン、ジョン・アバクロンビー、ジョン・スコフィールドらとも会いたいし、ニューヨークの中国料理も食べたいしね。それで昨年はリーブマンたちと往年の「クエスト」を再編成して米国内と欧州のツアーもした。

ところで、私が教えているメンデルスゾーン音楽大学のジャズ学部は近年ようやく国際的なレベルの教育が施されるような体制を整え始めたばかりだ。私が教えているのは、ジャズ・ピアノ全般、ピアノの個人指導、それに2つのアン